

大学史料室通信



新校舎「農大アカデミアセンター」は、本誌発行後、間もなく竣工する。建物全体は農大にふさわしいアースカラーの瀟洒な外観で、地下二階、地上九階のうち、地下の二階と地上の三階から七階までが図書館（六階は一部、他の部署と共有）である。他の階は、法人本部・大学事務局などに充てられているが、その中で一階の一角に図書館が管理する部屋がある。中庭からエントランスに入ってすぐ左、これが東京農業大学展示スペース「実学の杜」である。「農大アカデミアセンター」の竣工は十一月であるが、図書館の開館は来年の四月を予定している。「実学の杜」を皆さまにお披露目できるのも、そのころになりそうだが、ここではそれに先だってこの「実学の杜」の概要を紹介しておきたい。

「実学の杜」は、五つの区画から成っている。入り口を入れて、まず直面するのが「建学のころ」、次いで左に回りこみ、部屋の左壁面が「二人の学祖」、この区画では農大の生みの親・榎本武揚と育ての親・横井時敬に関する展示を行う。ここから右に回って、正面奥の壁面が「農大のあゆみ」で、農大の誕生と発展を描くヒストリーウォール、そしてさらに右に回り込むと、右壁面が「農大の取り組み、農大のマンパワー」、ここでは農山村支援、東日本支援プロジェクト、国際協力、海外校友の活躍、経営者フォーラム等々、農大の現状について紹介することになっている。最後に、部屋の中央に位置するのが「リラクゼーションスペース」である。ソファなどを置き、休憩を兼ねながら、農友会各部やサークルなど在校生・卒業生の成果を鑑賞し、また『農大新聞』や『農大カルタ』などを通じて過去にも思いを馳せることができる。

細部については詰めている最中であるが、総じて言えば、「実学の府」としての東京農業大学の、過去と未来を含めた全体を簡潔に俯瞰し、来場者（来校者）に東京農業大学を理解していただく糸口になればと願ってやまない。

（友田記）

大学史料室所蔵史料の紹介 (三)

明治期の農業教育用掛図

「第五 植物図」および「各種家禽写生図」

大学史料室は、明治期に刊行、あるいは使用されたと思われる何種類かの教育用掛図を収蔵している。

ここでは、二種類の掛図を紹介してみたい。一つは「第五 植物図」と題された掛図、もう一つは「各種家禽写生図」である。

教育や啓蒙活動で使用された教材・教具には、紙芝居、幻灯、双六、番付など様々なものがあるが、中でも学校教育の場で使用された教材の代表が掛図であった。掛図とは、「学校の教室で黒板ないし壁面に掲げて教授に使用した比較的大判の絵図や表など」(玉川大学教育博物館『掛図にみる教育の歴史』二〇



*第五 植物図

〇六年)である。明治期から使用されるようになり、初期のものとしては、一八七三年(明治六)に東京師範学校が、アメリカ製掛図に模して作った「五十音図」「数字図」「単語図」「連語図」など全二十八枚(翌年「伊呂波図」などを加えて改版され全三十枚)が知られている。

文部省では、これと並行して一八七三年から七八年(明治十一)にかけて、通称「博物図」を刊行した。植物関係五図、動物関係五図の全十枚である。玉川大学教育博物館は、このうち植物関係四図(「第一博物図」(「第四博物図」と動物関係五図(「動物第一」(「動物第五」)を所蔵している。動物関係の図には「動物第何」とあるだけで、「博物図」というタイトルは付けられていない。ちなみに、植物関係の「博物

図」は、国立公文書館のデジタルアーカイブでも見ることができ、同館でも所蔵しているのは、第一から第四までの四枚だけである。

さて、大学史料室では、文部省「博物図」と同じものを、植物関係では五図、動物関係では第三を除く四図の計九枚所蔵している。図や解説文等は、他機関の所蔵掛図と変わらない。ただし、植物関係の図で、玉川大学や国立公文書館のものとは異なっている点が一つだけある。すなわち、図のタイトルが「博物図」ではなく、「植物図」となっている点である。その理由については、ある程度推測可能であるが、ここでは立ち入らない。いずれにしても、植物関係の「第五」図は、玉川大学教育博物館にも国立公文書館にも所蔵されていない貴重資料である。

同図は、他の植物関係図がいずれも一八七三年に刊行されたのに対して、唯一、動物図も含めた一連の図の最後に当たる一八七八年(明治十一)三月に刊行されている。小野職慤(おの・もとよし、幕末く明治期の博物学者、小野蘭山の玄孫)撰、服部雪斎(はっとり・せつさい、幕末く明治期の博物画家、田中芳男・小野職慤編『有用植物図説』が代表作)画、神原芳野(さかきばら・よし)の、幕末く明治期の国学者)校、内容は「各用部」「織布料」「製紙料」「搾油料」「染色料」といった工芸作物の図譜である。

参考までに、他の植物図の内容は、第一が「全葉之形」「葉端之形」「根塊之形」「複花之形」「単花之形」など、第二が果実と「瓜果類」、第三が「穀物之類」「莢豆之類」「根塊之類」、第四が「葉茎類」「葷辛類」「海草類」などとなっている。

続いて、「各種家禽写生図」について解説しておく。本図のタイトル全文は、「実業図画第一号 各種家禽写生図 農科大学教授農学博士本田幸介先生図案并説明」である。一九〇三年(明治三十六)、浅草区北富坂町の国本館より刊行された。本図は上から「採卵鶏」「卵肉兼用種」「肉用種」「愛翫種」に分けて家禽図が描かれ、最下段が「家禽飼養心得」という説明文になっている。ちなみに、本掛図は、名古屋大学中央図書館も所蔵していることが確認されている。

さて、図案・説明を担当した本田幸介(一八六四〜一九三〇)は、薩摩藩士の次男として生まれ、一八八〇年(明治十三)駒場農学校農学科に入学、八六年、同校の後身である東京農林学校を四期生として卒業後は、農商務省に入省した。一八八九年(明治二十二年)東京農林学校教授に就任し、翌九〇年、

同校の文部省移管にともなって帝国大学農科大学助教授となった。ドイツ留学を経て、帰国後は教授として畜産学講座を担当、一八九九年(明治三十二)に横井時敬ら九名とともに日本初の農学博士となった。当時の日本における畜産学研究の第一人者である。一九〇六(明治三十九)朝鮮に渡り、統監府勸業模範場長に就任、その後韓国併合後も朝鮮総督府勸業模範場長、水原農林学校長、朝鮮農会副会頭を務め、「ひとり農事試験研究機関の長」という立場にとどまることなく、農政分野の事実上のトップとして朝鮮農政の最初の骨格を形作る上で主導的な役割(土井浩嗣「本田幸介関係文献目録」『海外事情研究』第四十巻第一号、熊本学園大学附属海外事情研究所、二〇一二年)を果たした。一九一九年(大正八)、病のため辞任・帰国後は、九州帝国大学

農学部長を務めた。なお、東京農業大学参事にも就任しているようだが、任期等については定かでない。ちなみに、幕末の薩摩藩イギリス留学生の一人で、ちに森有礼らとアメリカに渡り、カリフォルニアのブドウ王と呼ばれた長沢鼎は、本田の叔父に当たるといわれる。最後に、本図は「実業図画第一号」と題されているが、その「第二号」のタイトルは、筆者所蔵品では「稲作改良手引図 農学博士酒匂常明君調査図案」である。酒匂の同級生・盟友であり、良きライバルでもあった横井時敬の発明になる塩水撰種法や短冊形共同苗代、正条植、耕地整理、害虫防除等々、サーベル農政として知られる、当時の重要な農政課題「農事必行事項」に関わる図が掲載されている。ちなみに、この「実業図画」のシリーズが何号まで発行されたについては、現在のところ不明である。(友田記)



*各種家禽写生図

東京農業大学の人々(二) — 河村九淵 —

一八九三年(明治二十六年)五月、育英農科は私立東京農学校と改称され、榎本武揚が校長、伊庭想太郎が校長、そして河村九淵(かわむら・ちかす)が主任講師に就任した。『東京農業大学五十年史』で、編者の元図書館長大野史朗氏は、河村は「育英の時代より教職に在り、教授上に尽くせる功、多大なるもの」があったと評価している。また、『東京農業大学百年史』に掲載されている第二回卒業生・故表生富郎氏の回想でも、河村は学校の「大きな支柱」で、「生徒の信望を集め」、河村辞職の際、「その留任運動は猛烈をきわめた」という。

河村九淵は、一八六三年(文久三)一月十三日、津山藩士河村浩一の長男として江戸で生まれた。東京大学予備門を経て、一八八〇年(明治十三)札幌農学校に入学、一八八四年(明治十七)に同校を四期生として卒業した。同期生に、名著『日本風景論』で知られる地理学者・志賀重昂がいる。

札幌農学校卒業後、同年八月、山梨県農事講習所(同年十一月農学校と改称)三等教諭に就任したが、同校廃校にもなつて、茨城県に転任、同窓の渡瀬寅次郎校長の下で、同県尋常中学校教諭となった。その後、渡瀬との関係もあったのであろう、上京して育英農科、さらに私立東京農学校で教鞭をとった。東京農学校辞職後は、奈良英和学校の再興に尽力、さらに香川県高松尋常中学校校長となった。この香川県在任中に同県知事であった徳久恒範が、熊本県知事に転任、一八九九年(明治三十二)四月、熊本農業学校の創設にあたって、河村九淵を

招聘し、ここに河村は同校の初代校長に就任した。

河村は一九〇六年(明治三十九)三月に同校を辞するまで、七年間にわたつて熊本県における農業教育の発展や、同県農業の振興のために尽力し、多大な功績を遺した。後に富民協会の重鎮となる手島新十郎(第一期生)、肥後農友会(のち日本農友会)を創設し、「昭和の農聖」と謳われた松田喜一(第三期生)などは、いずれも河村の薫陶を受けた人物である。

熊本農業学校辞職後は、実業界に身を転じ、大日本造肥料株式会社、智利硝石普及会日本本部、東洋種苗園、大日本醗酵素株式会社、人造肥料聯合会、愛媛農事株式会社などの重職を歴任した。編著書としては『米作五石実収の研究』『大日本人造肥料株式会社創業三十年記念誌』『葉草大鑑』『日本農業革新論』など枚挙に遑がない。一九三四年(昭和九)東京世田谷で永眠、享年七十二歳であった。(友田記)



第三十八回榎本・横井研究会を開催

二〇一三年七月二十二日、東京農業大学本部四階会議室において、第三十八回榎本・横井研究会が開催されました。今回の研究会では、本学教職・学術情報課程の惟村直公准教授が、「創始者の人物書誌作成」というテーマで、学術情報課程のプロジェクト型参加学習としての、受講学生による榎本武揚の人物書誌作成について発表いただき、活発な意見が交換されました。

編集後記

間もなく第一二回収穫祭が開催されます。今年も大勢のお客様たちで賑わうことでしょう。新校舎「農大アカデミアセンター」は、収穫祭には間に合いませんでしたが、竣工は間近です。次回の『大学史料室通信』では、新校舎の展示スペース「実学の杜」の展示資料について紹介する予定です。

*本文中で*印の付いている資料は当史料室の所蔵資料です。

当史料室では東京農業大学史に関する資料をひろく収集しております。東京農業大学史関係資料や、各種情報などがございましたら、どのようなことでも結構ですので、左記までご一報くだされば幸いです。

東京農業大学

世田谷学術情報センター(図書館)大学史料室

T156-8502

東京都世田谷区桜丘1-1-1

電話・03-5477-2526

FAX・03-5477-2639